

星野常夫教授 退職に際して

八藤後 忠夫

星野常夫教授は、2020（令和2）年3月31日をもって定年退職される運びとなりました。まずはその長きに亘るお仕事の大なる成果にこころから感謝申し上げます。同時にこれまでの教室運営に関わるご苦勞をお察し申し上げ、重ねて感謝と御礼を申し上げます。

先生は、1980（昭和55）年4月に文教大学教育学部専任講師として特殊教育専修（現・特別支援教育専修）に着任され、41年間の長きに亘って障害児教育の研究ならびに全国津々浦々から入学する多くの学生への指導を貫徹され、私たち後任の教員や助手も暖かい指導を頂きました。

先生の経歴と業績の詳細は該当ページのとおりですが、特にその経歴においては入学センター長や学校教育課程長などきわめて重要な役職を含む広範な部署の要職を全うされました。殊に入試部（現・入試委員会）でのご経験から入試への強い思い入れが印象的です。

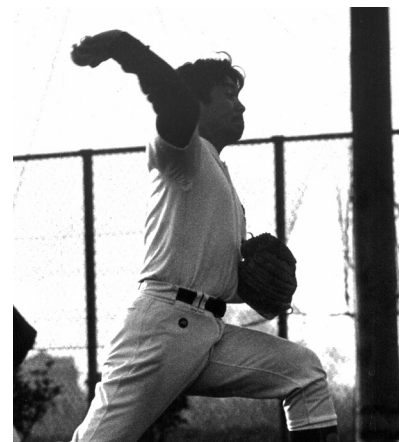
かつての入試業務はまさに手作業そのもので作業時間も膨大であったと伺ったことがあります。夜を徹して一升瓶を傍らに、教員同士の信頼関係に基づいた真剣かつ和やかな作業の時代があったとも聞いています。その意味で先生は、まさに文教大学発足直後の古き良き時代を知る“元荒川最後の生息シーラカンス”！？冗談が過ぎました。先生の研究を概観しましょう。

先生は学部・大学院を通じて特に、セガンやブルヌヴィルらを中心とするフランス前近代から近代における教育学・障害児教育学の歴史・思想史を専門として研究を続けてこられました。

不覚にも私はその研究成果の殆どに関して無知であり、今もって先生から学びきれてはいません。ご退職後にゆっくりとお話を伺うことにしています。

私が2003年に先生からのお誘いを受けてこの学び舎に着任していたころ、美術（水彩画）をご専門とする障害児学校に職を置いている現職の先生が星野教授を求めて2年間ほど研究室で論文作成に没頭しておられました。美術という表現と障害児教育の方法的接点は今でこそ一般的になっていますが、その頃は新しい着眼点としてこの私も大いに興味を持ったことを思い出します。

閑話休題！先生が着任当時以降、野球部の顧問として学生部員とともにこれも長く熱心に指導されてきたことは私を含め、あまり知られてはいません。折角ですのでここに往年の投球フォームをご本人に無断で披露させて頂きます。力学的にも見事なフォームです。高校時代にハンドボール部の選手であったと聞かされ、なるほど！と得心しました。



因みに現在は少し猫背気味の渋さと寡黙な漂いが売りです。

私は先生より3歳ほど若いのですが、どのみちあと10年も経てば両者とも立派な「後期高齢者」。偶然にもどこかの老人福祉施設なんかで入所者として杖なんか突きながら出くわし、「こんにちは！初めまして！」なんて真顔で再会するかもしれませんね。

いずれにせよ、星野常夫教授、ご苦労様でした。

全国津々浦々から先生の最終講義に馳せ参じる沢山の教え子の方々と一緒にご退職をお祝いいたします。

(やとうご ただお 文教大学教育学部学校教育課程特別支援教育専修主任)